

シヅム「沈」とシヅム「鎮」

——金田一法則から見る——（下）

蜂 矢 真 郷

（「上」に続く）

さて、シヅム「沈」とシヅム「鎮」とが、アクセントについての金田一法則から見て別語ということになると、それに関連するいくつかの点について見ておく必要がある。

まずは、シタ「下」・シモ「下」との関係である。
シタ「下」・シモ「下」の『名義抄』のアクセントは、

下シタ（上平）（観仏上七四「40ウ」） 榊シタモ（上上上平）（図三三五）

下シモ（上〇）（高40ウ） 以下シモツカタ（上上上上平）（同）

のように（「高」は高山寺本、「季」は季綱切韻か）、いずれも高起式であるので、シタ「下」・シモ「下」のシと合わせてとらえられる可能性は、シヅム「沈」の方にある。

右に「シタ「下」・シモ「下」のシ」としたが、シ「下」の例に、シヅエ「下枝」・シハニ「下土」がある（エの左傍線は、ヤ行エを表す）。

シヅエ「下枝」・シモツエ「下枝」……上つ枝は鳥居枯らし下つ枝は（志豆延波）人取り枯らし三つ栗の中つ枝の……『古事記』中巻・応神・四三三）
…上つ枝は天を覆へり 中つ枝は東を覆へり 下つ枝は（志豆延波）鄙を覆へり
……下つ枝に（斯毛都延余）落ち触らばへ……『同』下巻・雄略・九九）

シハニ「下土」……端つ土は膚赤らけみ 下土は（志波迹波）に黒きゆるみ 三つ栗のその中つ土の……『古事記』中巻・応神・四二二）

シヅエ「下枝」は、ホツエ「上枝」と対になり、ナカツエ「中枝」とともに用いられるので、シ「下」の例と見てよい。ホツエ「上枝」・ナカツエ「中枝」のツは連体助詞と見られるので、シヅエ「下枝」のツは連体助詞ツが濁音化したものかと思られるが、濁音化の事情は明確でない。右のように、シヅエ「下枝」ともシモツエ「下枝」ともある例もある（モの右傍線は、上代特殊仮名遣の甲類を表す）。なお、シヅエ「下枝」のアクセントは、『名義抄』にないが、『日本書紀』兼右本に「辞豆曳（上上上）」（巻十・応神・三五、守晟本も同様（但しシヅエの訓なし）、「豆」はツを表す）の例があるので、高起式と見てよい。

シハニ「下土」は、『大言海』「富山房」に「極土ノ意、十二月ノ志はモ、同意」底ノ極ミニアル土。」とあるように、シハ「極・底」十二「土」の複合と見る説もある。ハツニ「端

「土」と対になり、ナカツニ「中土」とともに用いられるので、ニ「土」の例と見たいところではあるが、シハ「極・底」の例が確認できないので、シ「下」とハニ「土・埴」との複合と見るようになる。『上代編』に「底土。シ(下・底)ニハニ(土)か。」と、『岩波古語辞典』〔初版・補訂版〕に「▽シ(下)ハニ(土)」の合成語という。」とある。なお、シハニ「下土」のアクセントは不明である。

クラジ「倉下」 兄倉下弟倉下(略) 倉下 此云衢羅餌(『日本書紀』卷三・神武即位前・戊午年十一月)〔兄倉下・弟倉下(略) 倉下、此をば衢羅餌と云ふ〕

今一つ、クラジ「倉下」のシも、シ「下」かと言われる。ただ、固有名詞の例しか見当たらない(「此云」は、漢文の訓みとしては「此には…云ふ」とするのが正しいとされるが、『日本書紀』古訓には「此^{コレヲハ}」とあるので、それによる)。

これらの例に見えるシ「下」が、ハタ「端」・ヘタ「辺」などに見える接尾語を伴ったものが、シタ「下」と考えられる。『上代編』の「へた」「辺・畔」(名)の項の【考】には、「端・辺の意で、単独に用いられる辺と、カナタ・コナタやアヒダ・端^{シツ}・下などの接尾語的要素との複合語か。」とある(「接尾語的要素」とあるが、「接尾語」としてよいと見られる)。

また、シ「下」が、オモ「面」と複合して、母音の連続を避け縮約したものが、シモ「下」であろう。『上代編』の「も」「方・面」(名)の項には、「方向。あたり。面^{オモ}のオが落ちたものともいわれる。複合語の中のみ認められる。」とある。

ただ、そのように見る場合には、前掲シモツエ「下枝」の例によりシモ「下」のモが甲類であることが問題になる。

一般に、二音節語で第一音節も第二音節もオ列甲類であるものは、擬音語^ココ^コ〔俗説謂^二猿声^一為^二古々^一〕(常陸国風土記久慈郡)〔俗の説に、猿の声を謂ひて古々と為す〕・同^コゴ^ゴ〔…辛塩にこごと揉み(古胡登毛美)…〕(『万葉集』卷十六・三八八〇)・同^トド^ド〔馬の音のどどともすれば(跡杼登毛為者)…〕(『同』卷十一・二六五三)・名詞^モモ^モ〔股〕〔…股長に(毛々那賀尔)寝は寝さむを…〕(『古事記』卷上・神代・三)・数詞^モモ^モ〔百〕〔百伝ふ(毛々豆多布)角鹿の蟹…〕(『同』卷中・応神・四二)のように、二つの音節が同音ないし清濁が異なる類音であるのが通常であるとされる。

他方、二音節語のオ列の甲乙が第一音節と第二音節とで異なることは、池上禎造氏「古事記に於ける仮名「毛・母」に就いて」(『国語・国文』2-10 [1932.10])・有坂秀世氏「古代日本語に於ける音節結合の法則」(『国語音韻史の研究』[1944.7 明世堂書店、1957.10増補新版三省堂]、もと「国語と国文学」11-1 [1934.11])による有坂・池上法則に、「第一則 甲類のオ列音と乙類のオ列音とは、同一結合単位に共存することが無い。」(有坂氏)とあることにより、あり得ない。

シモ「下」をシ「下」+オモ「面」の縮約と見ると、シモのモが甲類であることによつてオモ「面」のモが甲類であることになり、それは、二音節語で第一音節も第二音節もオ列であるもの一般と異なることになって、この見方はよろしくないということがあります。

しかしながら、ムコ「聳」の母音交替と見られるモコ「聳」「ちはやぶる宇治の渡に棹取りに速けむ人し我が仲間に来む（和賀毛古迹許傘）」（『古事記』巻中・応神・五〇）の例があり、また、海藻であるゴモ「海蓴」「母豆久六斗／古母二斛八斗／伊伎須十三斛」（正倉院文書・造仏所作物帳・天平六〔3〕年五月、原文に振り仮名なし）の例もあるので、オモ「面」のモが甲類であってもよいと見ることができないではない。

ウへ「上」の対義語としてシタ「下」が、カミ「上」の対義語としてシモ「下」が用いられるように、分化して行ったものと見られる。なお、『上代編』の「しもつえ（名）」の項の【考】には、「ウへに対する語がシタで、カミに対する語がシモである。」とある。

他方で、シヅム「鎮」に関連する語として、垂らす意の動詞シヅ「垂」（下二段）があり、シヅ「垂」が動詞化接尾辞を伴って派生した動詞に、シダル「垂」・シヅクがある。

シヅ「垂」（下二段） 於⁽¹⁾下枝⁽²⁾ 取⁽³⁾垂白丹寸手青丹寸手⁽⁴⁾ 而訓垂 云志殿（『古事記』上巻・神代）「下づ枝に白丹寸手・青丹寸手を取り垂でて垂を訓みて志殿と云ふ」 後れにし人を偲はく四泥の崎木綿取り垂でて（木綿取之泥而）幸くとそ思ふ（『万葉集』巻六・一〇三二）

シダル「垂」（四段） 吉備笠臣垂（略）垂 此云之娜屨（『日本書紀』卷二十五・孝徳天皇・大化元年九月、人名）〔吉備笠臣垂（略）垂、此をば之娜屨と云ふ〕 我が門のや垂ら小柳（之太良古也奈支）さはれ とうとう 垂る小柳（之太留古也奈支）垂るかいては（之太留加伊天波）なやや 垂る小柳（之太留古也奈支）（『風俗歌』二〇・我門）

シヅク（四段） 藤波の影成す海の底清みしづく石をも（之都久石乎毛）玉とそ吾が見る（『万葉集』巻十九・四一九九）

そして、シヅム「鎮」は、動詞シダル「垂」・シヅクと同様に、動詞シヅ「垂」が動詞化接尾辞を伴って派生したととらえるのがよいと考えられる。

シヅ「垂」のアクセントは、『日本書紀』兼夏本所引日本書紀私記にトリシデテ「懸^{トリシデテ、止利之豆}」（神代上・第七段本書）とあり、低起式と見られる。シダル「垂」のアクセントは、シダリヤナギ「柳シダリヤナキ（平上平上〇〇）」（『名義抄』観仏下本八三〔43才〕）により、低起式と見られる。シヅクのそれは、『古今集』家隆本などの「みづのおもにしづくはなのいろ…」（八四五）に「しづく」（平上上）とあり、低起式と見られる。

右のように、動詞シヅ「垂」が動詞化接尾辞を伴って、シダル「垂」・シヅク・シヅム「鎮」が構成されたものととらえられる。

他方、アクセントの異なるシヅム「沈」の構成はどうであろうか。

ここで考えられるのは、シ「下」との関連である。とすると、シ「下」と動詞ツム「積」とが複合して、下に積んだようになる意、下に積んだようにする意、を表すととらえるのは如何であろうか。しかしながら、ツム「積」は、自動詞「四段」と他動詞「四段」とがあるのに対して、シヅム「沈」は、自動詞「四段」と他動詞「下二段」とであり、シ「下」

＋ツム「積」〔四段〕が他動詞〔下二段〕になることは、とても考えられない。つまり、シツム「沈」の構成をシ「下」＋ツム「積」と見るのには無理がある。シツム「沈」のシをシ「下」と見るとしても、結局のところ、シツム「沈」の構成は、残念ながら未詳とせざるを得ないであろう。

以上、シツム「沈」とシツム「鎮」とのアクセントが異なることについて、金田一法則に基づいて検討し、その上で、関連するいくつかの語をどうとらえるのがよいか、考えたことを述べた。

〔付記〕本稿は、上代語研究会で議論されたことを、担当者である蜂矢がまとめたものである。上代のシヅマル「鎮」の意を『神霊が一定の場所に落ち着く。国内が静かになる。』としたのは、その議論の結果である。永井荷風「野心」の例の確認は、木下朗氏のお世話になった。また、「シツム「沈」とシツム「鎮」』という題は、尾山慎氏の提案によっている。会の皆さんに感謝するものである。

（上）が掲載された後に気づいたことであるが、『古語大辞典』『小学館』は、シツム「沈」とシツム「鎮・静」とを別の項にし、前者の「語誌」欄に「類聚名義抄によれば、アクセントは上上平で、「鎮む」の平平上とは区別されている。」（伊牟田経久氏執筆）と記されている。〔付記〕を追加することで、お許し願いたい。